この道を生き抜く「シベリア」の庶民生活

中　村　幸　造

1. シベリアは待っている

世界の舞台が大きく回ることによって，日本海時代の到来を夢みつつ，国際情勢の激動のなかで「シベリア」をながめたい。

「シベリア」の第一印象は，と問はれて，若い人たちが活気と希望に満ちて**いる**とは，いえないが，彼等は自分たちの力で，あすの社会を作りたい，いや築きたい意気込みだけは目につく。

船で一昼夜，飛行機で一時間半，船賃にしても片道二万円少々だが，私どもが出かけた当時はたしか船賃片道53円そこそこだったと思っている。今は横浜又は新潟，敦賀（伏木舞鶴）から出ているが，当時は露国義勇艦隊といって，汽船といえば汽船，軍艦といえば軍艦で，あの日本海を四十八時間で渡ったが今は半分の時間で，シベリアを夢みつつ，日本海の横断も簡単だし，初めて見る日本海の太陽は実に大きい。「シベリア」には豊富な資源がある，日本向け木材の積み出しに活気づいている。「ナホトカ」も目の前に見えるようだ。日本海時代ともなれば，ソ連側からは，自国の労働力不足の補い，大幅な機械力の導入に，日本側にしてみれば，生産財の輸入策略，シベリア開発資材の輸出作戦など，日ソ相互にとりくむ課題が横たわっている。

夏のシベリア（8日間）の旅はとても人気がある。雄大な自然と心豊かなロシア人との語らいなど，或はシベリア（14日間）キャンプ旅行。或は八月十一日から八月二十八日までの「ハバロスク」でのロシア語「ゼミナール」など日ソ間の近親感をいだかせるものが数多く計画されている。

久々に年末年始にかけて，ソ連船に行くやら，ソ連人と心の親交を深めながら新年を乾杯した。

大阪税関敦賀支署の話しによると，敦賀港へ昨年度に入った外国貿易船の隻数112，その内ソ連船78隻が北洋材を積んで入港している。ちなみに一昨年はソ連船52（外南米，オーストラリアなどから亜鉛鉱，リン鉱石を運んだ「リベリア」船11隻，韓国船の7隻，いずれも釜山港へ，日本政府米を，パナマ，ノルウエー，イギリス3隻，フィリピン2隻，ギリシヤ，デンマーク，クウェート等）ソ連船二隻が異国の地，敦賀港で日本の正月を迎える。敦賀港ではここ数年，停泊中のまま正月を迎える外国船はなかっただけに，敦賀税関支署でも珍しいことだといっている。

この船は「プレアレス号」（4,673トン）と「パルナウル号」（4,531トン）の二隻で，いずれも北洋材を積んできた。

プレアレス号は昨年十二月二十三日ウラジオストクを出港，二十五日に入港した。乗組員は三十五人。一月六日まで停泊する。

バルナウル号は同じ十二月二十六日ナホトカを出港，二十八日に入港した。乗組員は三十六人，八日まで停泊する。船員たちは，正月を自国で迎えられない寂しさは隠せない様子。「早く荷役を

終えて」と業者に催促するが，業者も正月は休むとあって，がっかり，「それでは，ソ連の正月と同じように，ウオッカとコニヤックを飲んで過ごそう」と話していた。

「万国博でのソ連館の威容」そのソ連館を見るために列に着いたが五十分は待たされた。

待望のソ連館は，なんとか「レイニン」の生誕百年の記念行事の一つでもあったとのこと。シベリアの開発とアメリカと競う宇宙開発や，ソ連の歴史，生活，国土開発の姿の紹介などもすばらしかった。

そのソ連は，世界の陸地の六分の一，シベリアだけでもアメリカ合衆国がゴッソリ入ってしまうという。

現在の総人口二億三千五百五十万人のうち，四分の三以上，一億八千万人以上が革命後に生れている。現にソ連を動かし，これからも動かしていくのは，すでに革命を知らぬ世代である。

その中に15の共和国，60もの民族が雑居する。言語でも使用人口2万以上のが59公用語だけでも11種という厄介で複雑なソ連邦だ。今でこそ鉄のカーテンに隙間が出来インツーリストで観光客の誘致に力を注いでいるとはいえ，見せてくれるものといえば，美しいもの，大きなもの，進んだものだけ，しかも向こうさまのスケジュール通りで，こちらの希望は少しもいれてはもらえない。

ところ構わずカメラを向けようものなら監視員がすぐピーッと笛を吹く。ソ連はいま「シベリア」や「ウラル」の開発に力を入れている。その基盤となる水力発電には異常な熱の入れかただ。600万キロワットという世界一の「ブラック」の発電所も，その町づくりも，これもまた特に大仕掛けで感心の外はない。

しかし，こうした開発にはまず人間だ，ソ連の生活の向上と文化の進展，それに観光客の誘致と，ともに忍び込む西欧の風，愛国心にうったえての義勇隊も思うに任せぬ。

月給は4割高，休暇も5割増しと躍起となっているが，シベリアの荒野へ進んで……という篤志家は容易に得られないのが実情のようだ，革命50数年，遅れた農業国は，社会主義化によって，米国に次ぐ，強国な重工業と国防力を建設した。いま資本主義に学んだ新経済制度によって，はじめて豊かな消費生活へのトビラを開こうとしている。果してこれからの，ソ連はどこへゆこうとしているのだろうか。

多民族国家といっても，もっと，もっと分解すると，あのソ連の一つの国に126もの民族が住んでいるのは，おそらくソビエトだけだろう。ちょつと古いが数年前の国勢調査によると，ソビエトで最小の民族はアレウト族で421人。しかしアレウト族はアリュシヤン列島を中心に生活し，アメリカ領にもかなり住んでいるといわれるので，厳密には最小の民族とはいえない。

したがって，その次のユカギル族442人がソビエト最小の民族になる。次いでンガナサン族748人，オロチ族（オロチョン族）782人の順となっている。これらの少数民族はほとんどがシベリアで生活し，死滅したりロシア人と同化して名前だけ残っている民族もある。最大の民族はいうまでもなくロシア人で，1億1800万位だが現在はもっとふえているに違いない。次いでウクライナ人の3,700万，白ロシア人の790万となっている。シベリアは公式には4,000万といったところ。現在ソビエトの地方行政機構や党機構でトップの座を占めているのは，地元の人々だが実権を握っている

のはロシア人だといえるだろう。名を与えて実をとる方式がソビエト政権の伝統的な民族政策になっている。

人口の比率では圧倒的に多いスラブ民族がよその地域に次第に侵透して行き，能力の優れたこの民族がその地域を握ってしまうケースもある。また中央から有望な若手がその地方の枢要な地位に送りこまれることも少くない。では一方にロシア人に対するその地域の人々の感情はどうであろうか。

ソビエートでは人種問題の差別は全くなく，民族間の好悪感情もあまりない。飛行機の中でも，ロシア人と黄色い顔の中央アジア民族が平気でいっしょにすわり談笑している風景もみかける。

その点ではあけっぱなしなロシア人に対して，ほかの民族は大ざっぱにいって好感を持っているようだ。ロシア人と有色人種の間の結婚の例も多い。しかしもう一歩踏みこんでみると，やはりロシア人とほかの民族の間の微妙なコンプレックスを感じないわけには行かない。

コーカサスや中央アジアでは，ロシア人が実力者の地位についていることに不満をもらす地元の人々に出会ったし，「リトアニア」では，ロシア語で話しかけても英語で答える放送局の「プロデューサー」がいた。

とにかく，多くの民族を抱えるソビエートでは，民族政策に非常に神経を使っていることは事実である。

2. この道とは

米国，日本など西側のブルジュア世界でブームを呼んでいる「ボーリング」が，ついにソ連侵略に乗り出すことになった。ことの起こりは，この夏「モスクワのゴーリキー公園」で開かれた見本市「アトラクション・71」で米国のある会社が，テント張りの仮設ボーリング場を出展したところ，最初に，ソ連の技術専門家がしかつめらしく視察にやってきた。

続いて現われたのが，体育専門家のグループ，そして会期の終るころには，「これは結構なものだ」と結論が出て，トントン拍子に商談が成立の運びにとなった。本年七月までに，「24レーン」のボーリング場がソ連にお目見えする予定。この，2，3カ所はシベリアの庶民生活にくいこむ予定である。

ソ連人といえば，マルクスレイニン主義で武装しているので，まるで人間性に欠けた，いわば「イデオロギーを食って生きている」人間であると思いやすい。もちろんそういう半面もたしかにあるし，とくに共産党員のなかには，そういうタイプの人間も多いらしい。

しかし2億何千万人の人口のうち，党員はわずかに5・600万にすぎきいし，一般の市民や農民は必ずしもそうでもなさそうだというよりも，やはりいまなおどこかに，昔ながらのスラブ人の血が流れていることは確かである。

われわれの知っているロシア人は，第一によくいえば，ボルガ河，みたいに「応揚」で素朴なところがあり，悪くいうと，お人好しで，ノロマで怠けものが多かった。もちろん白系ロシア人とは，その住む社会の環境や，物質的な条件が違っているので，一概にそうだったとは，断定できな

いだろうが，しかし意外だったことは，ときどきそういうタイプのロシア人ともたくさん出会ったことである。

昔のロシア人は，何か困ったことがあると口ぐせのように「ニチエゴー」というものだ。

例えばレーニン廟詣でのため何時間も行列していながら，時間がきて自分のところで，「きようはここまで」と民警にいわれても，日本人の場合だと「そんなバカなことがあるか」と食ってかかるところだが，彼らは「ニチエゴー」といっておとなしく引き退る。

昔のロシア人は，「サモワール」と「ペェチカ」，「トロイカ」で表彰されるように，当時のヨーロッパ文化水準とくらべて，お世辞にも合理主義とはいえなかった。

ところがそのロシア人が，現在のソ連人気質の中には，世紀にわたってつちかわれたスラヴ人の伝統と，革命後新しく形成されたソビエート気質とが「共存」しているのであり，ここに現在のソ連人が外国人であるわれわれに，なかなか理解しがたいナゾがある。と私はみたのである。

政府も大いに愛国心を鼓吹しているが，一般民衆の国を愛するこころが熱烈であるということだ。でも汽車の窓からみると，としよりの婦人が屈強な男にまじって，この炎天下に線路工夫をしていたり，ヨボヨボのおじいさんが，エレベーターの運転をしていることだった。「働かざるものは食うべからず」とはいってもあまり，みた目によいものではなかった。

ソ連に「言語の自由」があるだろうか。ある人は全然ないといい，ある人はいやある。という。見方によってこのように違う。

まあ「自由」の解釈はむづかしい。つまり「自由」の前提に「社会主義の建設」という視角が厳としてあるわけで，もしも逸脱するとここにソ連でいう「自由」の限界がある。

40に近いのに，いまなお独身税（ソビエートでは20才から50才までの男，20才から45才までの女に対し，所謂所得の6％という税金をとっている）を払っている，ある男に「何故結婚しないのか」ときくと，ニャツと笑って「別に不自由はしていないし，よほど相手を吟味しないと，離婚がむつかしいからネ」と答えていた。

とくに戦争未亡人や男の絶対数が少ないことから，街頭の掲示板に「部屋を貸します」という広告をだして，男を捜している女性もあるという。

そこで，資本主義と社会主義とのちがいであるが，具体的なものをみると，資本主義というものは，株式組識を中心にして動いている。そして株が高くなるということが，好景気である。これが資本主義と社会主義とを区別する。非常な特色である。たしかに，人間よりも，株式会社というものが支配的な大きな力をもっている。

これに対して，社会主義の経済は，個人が株式を通じて，生産手段，工場とか機械といったものを所有するとか，あるいは金融機関とい，あるいは流通機構，百貨店とか，そういうものを所有するのではなくて，国民みんなが，国有，あるいは国営というものを通じて，生産手段や，あるいは金融や流通機構を共同所有するものである。

具体的には，日常生活において，社会主義経済が，資本主義との極差は，公共料金のただである。さらに，ただの部分がふえるという点に，はっきり現われてきているわけである。たとえば上

下水道料金，電気，ガス料金，家賃，健康保険料とか，授業料とか，といったものが段々安くなるし，将来はただになる。

これは賃金以外に，公共料金等が安くなることを通じて収入がふえるということを意味ずけている。

それから，社会主義の労働観と合理化というものを資本主義社会との比は，社会主義の国では単に賃金をもらうために労働するのではない。という考え方，これは徹底しているわけである。その理由として，人間というものは，ものを創造するという本能があるはずである。人間というものは，本来怠けて何もしないでブラブラしているというのが本能でなくて，何か新しいものを生み出したい，という創造的な本能があるはずなので，この新しいものを生み出していくということを満足させるために，働くわけである。もう一つは自分だけがしあわせになるのではなくて，社会全体の人もしあわせにするために働くわけで，その結果として賃金をもらうわけであり，ここにいう社会主義の社会では，労働に対して認識をさせ，理解をさせる教育である。(実験教育，対験教育，汗を出す教育と同じように）つまり社会主義の国では働くこと，に対する考えかたは，人間としても，人類としても，非常に高い水準なのである。こんな事柄を「シベリア」では「この道とか，生きる道とか」としている。

3. ソ連に見る婦人の地位

半世紀前の「ボリシェビキ」革命で女性は完全に男性と対等の地位を獲得し，就学，職業の選択，賃金，いずれの面でも差別がなくなった。結婚と同時に家庭にはいり，夫や子供の世話だけに明け暮れる西側諸国の女性と違って，ソ連女性は結婚後も能力に応じた仕事を続けることによって，社会に貢献し，広い視野を持ち続けうる。「帝政下のロシアにおいては全時代を通じ，女性ほどしいたげられた存在はなかった。しかも偉大な十月革命（1917）は歴史に新時代を画し，労苦にあえぐすべての女性を解放し，経済，社会，政治，文化の全分野での男女平等を実現させた」

革命前は婦人にロシアは地獄であり，革命後は天国だといわんばかり。確かに，帝政下のロシアでは女性の地位は家畜よりいくらかマシといった程度だった。昼間は農場で牛馬のように酷使され，夜はつくろいや農具の手入れに忙しく，夫は文盲，赤貧で，しかも暴君ときている。夫が妻をなぐるのは日常朝飯前事であり，実質的には売買婚に近かったロシアの結婚制度下では，夫が妻を人間とはみずに，品物扱いにしたのはむしろ当然のことだった。革命はこのような悲惨な状況に少なくとも言葉の上では，終止符を打ち，職業，結婚，恋愛の自由を保護した。革命直後のソ連で，女性の地位が飛躍的に向上したことを示す。職業面でも男性と同じ分野への進出が許され，スターリンの長期計画による工業立国政策が発足するとともに婦人工業労働者に対する需要は急上昇，賃金も男女同一になった。

もっとも，職業面での男女の格差が完全に取り払われたのは第二次世界大戦中のことである。働き盛りの男性を中心に2,000万人の戦死者を出したこの国では，いまでも全人口のうち女性の占める比率は54.7%男性より10%（2,200万人）も多い。戦中，戦後男不足を補うために女性を（半ば

むやなく）

それまで男性専用とされていた職域に進出を遂げたのである。この結果，女性は医師の72%（歯科では83%）病院長の52%，トロリー，バス運転手の57%，繊維工の91%を占めるに至り，さらに弁護士（35%4,985人）公証人の数は2,100人で公証人総数の78.2%を占めている。

判事（32%）農学者（40%）大学，高専教育（32%）工場長（6%）建設労働者（20%）2,200人の理学博士，45,400人の理学修士など，これまで女性の姿がほとんど見られなかかった分野にかなりの進出を遂げた。

モスクワの国際空港に降り立っ人は，給油作業の中に女性を見出してビックリするだろう。空港ビルでは婦人の税務員が手荷物の検査をてきぱきと行ない，都心へ向かうタクシーの運転手まで女性ということもまれでない。

建築現場では，日本男子でも（二の足を）踏みそうな重い荷物をがっしりとしたカラダつきの中年婦人がかついでいるし，ラジオ，テレビのスイッチを入れれば，女性アナウンサーの声が流れてくる。女性は全労働者人口のほぼ半数を占め，20才～54才に限れば，80%が何らかの職業についている。働く婦人の比率は世界のどの国よりも高く，職域も広範にわたり，賃金面での差別もない。が，それでも男女間には，なにがしの格差は存在している。

中等教育を終えた技術者のうち，女性は62%の多数を占めながら，高等教育終了者では52%とかなりの格差が生じている。このことからも明らかなように，女性は現場でより多く重用され，監督的な業務や責任ある地位はほとんど男の独占にまかせている。

将棋で言えばソ連の女性は「歩」でしかない。

「両性間の平等」を建て前とする社会主義体制のもとで，どうしてこのような差別が生じるのだろうか。その最大の原因は，職業にかける意気ごみの違いである。多くの既婚婦人は自らが選んだ職業を「全身全霊をあげて」打ち込むためのものとは考えていない。

夫のサラリーだけでは足りないから仕方なく働いているという無気力組が圧倒的に多い。

家に帰れば主婦としての家事の大部分を引き受けねばならぬのが共働き婦人の悩み，職場での8時間に精根を使い果してしまったら，家庭での切り盛りはとうてい不可能である。

職業婦人とはいえ，主要な関心は帰宅後に向いており，仕事に対する興味も，熱意も，あまりないというのが偽りないといところ。これでは技術の進歩についていけず，結局いつまでも，「歩」のままで終わることになる。

最近の調査によると，農業の場合，肉体労働でない職務，たとえば作業班の長や会計係などはすべて男性が握っているという。共かせぎが常識のソ連婦人にとって，最大の悩みは育児である。乳児院や託児所が充実していることで有名なこの国でもやはり，希望さえすればだれでもはいれるというものではない。所定の年限を働き，安穏な年金生活を営んでいるおばあちゃんがいれば，そこに預けるのが普通，おばあちゃんもいなく施設も満員とあればやむなく休職して，窮乏生活をしいられるケースも少なくない。

運よく子供を施設に預けることができても自分で乳を与え，育てる機会を放棄するさびしさは，

言いようもない。また帰宅の途中，短時間にわっと押し寄せる共かせぎ主婦で，ごった返す商店で味わう買い物の苦労，献立の心配，仕事を持つ女性の悩みはどこも変わらない。

が主婦と労働がこうも密着してしまったソ連では，“主婦専業”の状態なんて想像も出来ないという女性が大部分。たとえば，繊維工場で働きながら夜は化学高校に通っている18才の少女は「職業も大事だけれど，あるいは主婦としての務めも同じほど主要だと思わないか」との質問に，その通りと答えながらも，でも一日中，狭い家の中に閉じこもって……という返事が返ってきた。

4. 一日，一週，一年の生活

革命五十週年によって，勤労者に与えられた贈り物は，週五日制の実施である。週二日の公休とは土曜，日曜と続けて休める様になったことで，それに祝祭日，日曜といれるとソ連の勤労者は一年の三分の一は休むことになった訳だ。国家管理の五日制と，資本主義の五日制には根本的に相違点のある事は注目に価する。

夏が近づいてくると，ソ連人勤労者の話題は，「オートプスク」に集中する。勿論職種により，勤続年数によって，二週間から二カ月位所謂有給休暇が与えられる。健康を犠牲にしてまで，かせぐ兼業農家の主婦や，出かせぎの人たちや，内職にはげむ主婦を含めて，働き蜂のように勤勉な日本の勤労者には納得のいかないことだろう。ソ連の勤労者は，一年一回のこの「オートプスク」にすべてをかけており，これでこそ働きがいがある。で，遊びと休息の一カ月をもらう為に，一年のあと十一カ月を夢中で働くという考え方が行き渡っている。

資本主義社会でないので，ボーナスの出る制度はない。けれども貯金をおろしたり，不用な中古品を売ったり，市営質屋に冬物衣料を入質するなり，休養の一カ月の入費の念出には苦労する。でも矢張り老後の心配のない社会保障制度には恵まれているが（文字の上では）経験のない私達にはタカネの花である。

ソ連婦人の中で，女友達同志の「ウエート」は高い。日本人には考えられない面が多い。「一寸記してみると」職場と，家事と育児，の負担はよそ目にも相当のものだ。でも女友達同志で映画にいく，誕生日に女友達を招く，一緒にお茶をのむ，女同志の関係を大切にしている。日本の様に夕方の帰り時間を気にする婦人の会合とは，民族的，伝統，習慣からくる，婦人の社会的地位の違いはかくせない。

すれ違いの生活，対話不足，不自由な消費生活からくる「カサカサ人間関係」から離婚のふえたのは事実だ。

婦人たちは，勿論出来る範囲内での家事と育児はするが，その不手際は自分が職場に出ているからだの反省はない。婦人が働くのがあたり前になっているから，家事，育児，買い物等一切婦人だけの負担ではない，夫か妻か子供か老母か，手のすいている者のすることだの一般的考え方だ。

婦人の地位の高いのと並んで，ソ連社会では自分にとらわれない考え方がいぜんとして有力である。幼ななじみが成長して社会的に地位の高い男の妻となっても，彼女の女友達が，たとえ掃除婦であっても，つきあいは以前同様に，お互に自宅によんだり，よばれたりしている。結婚の相手を

えらぶ場合に，まったく人物本位，家柄とか財産状態の対象にならないし，子持ちの女性の再婚もむずかしくない。

商店の多くは，10時に開く，しかし遅く開く店は遅くしまる。ときには20時とか21時とか働いている人たち本位の店もある。でも食糧品の店は，夕方にはもう品物がないのが普通である。数年前から土曜日，日曜日にも店を開くようになり，働いている人たちは，休日にも買い物が出来るようになった。

学校の教室は不足だ，解決策として，大部分が二部授業をしている。教育費全額国庫負担のソ連としては意外である。一部授業は朝の八時から，二部は十三時半から始まる。父兄も子供達も第一部を熱望しているが好きな方を選択出来るのは有力者だけ°

一般的にいって，食時は都合のよい時，いっでも食事をとる。家族が朝出る時間のまちまちが原因で，全員がいっしよに朝食をとることはたいてい不可能である。子供は「カーシヤ」あるいは乳制品にコーヒや紅茶，ほかにたいていソーセージとかニシンとかハムとかタマゴがつく。昼食は職場の食堂で，夕食はスープが中心になる。それにパンはロシア人の栄養にとって，あいかわらず重要な役割を演じている。パンの種類は非常に豊富である。まづ黒パンと白パンの二種類に大別されるが，黒パンなしではヴオトカは飲めないとソビエト人たちは考える。世界何れの国に於ても，食生活の発展は認められているがソビエトの人々は，いままでとは肉を，しだいにたくさん食べるようになりパンの消費量はだんだん減ってきている。

週末，土曜日，日曜日には，主婦はしなければならないことが山ほどある。主婦はたくさんの用事を引きうけなければならない。働いて，毎日，家を留守にしている主婦にとっては，週末はいろいろな用たしのできる唯一の機会でもある。ロシアの婦人は近ごろ，ますます姿や顔に髪に気を使うようになった。化粧用品は残念ながら，まだ充分に生産されてないし，その質も不満足のものが多い。

この100年の間に，婦人の容姿はおおいに変わった。少女や，とりわけ年ごろの娘の姿は以前よりもはるかにほっそりと，エレガントになった。

ソビエト・ロシアでは，自然の保護は国民的な義務とみなされ，森や川や動物の保護のために活発に戦っている有志たちが集まって，多数の団体やクラブをつくっている。この方面の機関には，農業者，地質省水源省などに所属している。自然保護の有志団体が膨大な寄附金を集め，暇な日はおおく戸外で過ごす。魚つりと狩猟は非常に人気がある。

ソ連邦では読書がはなはだ盛んである。またソ連は世界一の出版国で，一年に120万点の書物が出版されている。この数字は世界の出版物の総数の四分の一に相当する。国民一人当り平均5.5冊の本が生産されることになる。でも文化的施設はほとんど，どこへいっても苦情の種となっている。国民の福祉のためぜひとも必要なこうした施設をふやすことを政府は何回となく確約しているにもかかわらず，多くの部門で，実現の見込みは遅れるばかりである。

5. 彼等の魅力は社会保障制度か

ソ連市民は病気になって入院しても，あらゆる手術をふくむ病院での治療費は国家から支払われる。その上，仕事を休んでも勤続年数に応じて賃金の50%～100%が支給されるから，患者は少くとも経済的な心配なく，療養に専念できるわけである。「サナトリウム」は皆企業連合に所属している。休息の家の利用者数9,000万以上の内，650万人は無料，外は実費30%で保養，休養といったところ。たとえば病気にかかっとき，病院までゆくのがおっくうなら，「スコーラヤ・メジチンスカヤ・ポーモシチ」に電話一本すればすぐに医師と看護婦が，車でかけつけて診察してくれる。急患，ケガに限らずちよっとしたカゼでも，しかも診察は無料，処方箋によって薬だけ買えばよい。日本のように「本日休診」で診察を断られ，つぎつぎに医師の門をたたくということは，先づありえない。医療サービスが徹底していることはソ連の誇りのひとつでもある。ソ連の医師たちが，じつに自信に満ちて積極的に病人と取組んでいるといいたい。このために今後ソ連で倒れても最善の手当てをしてくれるだろうという信頼感さえ持てる。医者の70%が女医，さらに技師の37%が女性であり，どの職場に於ても婦人の職場の広さを私は目撃している。

私は日本とソ連との医学に対する根本的の考え方を発見した。庶民生活に於て，医者に対する経費の不安は，勿論世界共通のものであろうが，常識として，医師は男性とあるが，なぜソ連のみが女性職場進出の上で，女医が大いのか，「ハバロスク医科大学」で学長から次の数々を教えられた。何故医科大学で女性の学生が多数であるか（入試の結果合格者が女性が多いのか，或は男子の志願者が少ないのか）この質問に対して，学長は女性がいつの場合でも絶対多数で，男性が入試の不合格でないこと，つまり志願しないのだと。

女性はそれ自身，医学者に適すること，子供の泣き声から，子供の便から，育児と保健の要素を身につけていること。

男性は一体に医学に不適当といった訳ではないが，男性自体科学，重化学工場などの分野に進出することこそ男性の本分ではないか。勿論資本主義との相違点で，開業が目的の資本主義国の医師と国家管理の医師との開きである。ソ連ではどうせ月給取りなればもっと男性特有の職場進出に頭を向けたらといった面も考えられる。ソ連特有のねらいとして「医療とか教育，保育といった社会サービスが国家の手で確保されている」といった点が考えられる。今ソ連は人口当りの医師の数は世界一多くこれを誇りとしている。日本の場合無医地方は約3,000カ所といわれ，さらに公立病院では，3割，保健所では6割がそれぞれ医者欠員といわれている。現在わが国の医師数は134,000人で人口一万人当たり12.8人，京都府は人口一万人当り，16.3人で，最下位の埼玉県で7人，この点からみると医師の「偏在」を認めざるをえない。ソ連の医師数は645,000人，人口一万人につき，26人の割合となる。ソ連の総人口は世界の7%にすぎないのに，医師の数では世界の25%を占めているという。米国の19.2人，西独の19.5人，日本の12.8人に比べて26人では，断然多い。

だが，私の経験した限り，病院内では，日本の完全看護とはちがって，まさに人手を十分に使った本物の完全看護」だった。朝は洗面器と湯を持ったおばさんがベットまで「顔を洗え」とやって

くるし，食事，体温計，注射，便器，掃除，採血，ひっきりなしに，人間が出入りして，うるさいくらいだった。それもそのはず，ソ連の看護婦，保健婦，助産婦の数は，日本のざっと六倍，このほか雑役婦が，またはるかにたくさんいるようだ。とにかく医師が親切で，よく説明してくれ，完治まで根気よく治療するというのも，じつは同じような事情によるらしい（むろん患者のほうにも，ちゃんと経済的な裏付けがあるのだ，まず医療費は，食費，入院費用を含めていっさいタダ）この外ソ連では，実際やっていることだが，総合病院は同時に，日本の保健所のような予防，検診，生活指導を「病院観察」と称して徹底させている。つまり予防と治療が極めて密接な関係にあるために，病人は軽いうちに強制入院させられる。結局患者数は少なくなる。まさに病人天国，いや健康管理の天国，というべきか。医療の心配のないシベリア，彼等の心の寄りどころでもある。

シベリアの人たちは実によく散歩をする。月曜日に出勤すると，昨日はどこへ散歩に出かけましたかときまって誰かにたずねられるほど，休日には公園や郊外を歩くことが健康法の一つになっているようだ。

資本主義国のような観楽街がないから，休日には散歩でもする以外しか仕方がない。勿論考え方によれば，これはいたって健康な生活である。零下20度前後のうす雲り日，粉雪が舞いおりる，こんな天気を「すばらしい健康なお天気」と呼んで喜ぶ。

電気とかガスの料金は集金人が取りにくるのではなくて，毎月電気のメーターを自分で検べて金額を計算し，定額制のガス代とともに近くの貯金局へ払いにゆく。クリーニング屋はシーツ類の水洗いと，ドライクリーニングとが別々の店になっているし，靴の修繕を頼みに行くときは，修理個所を説明して交渉する。が最近は，靴の出張修理だとか，クリーニング配達制度，貯金局へ支払う，家賃や電気代，ガス代を住宅管理局で，一定の日に受取ってくれるなど，ここ数年とくにサービス面の改善に力をそそごうとしていることがわかる。これはみな，家事労働をできるだけ社会的労働に転化して，働く女性の負担を軽くしようとする政策の現れなのであろう。それにしてもソビエト主婦たちは家庭をとても大切にするし，夫やこどもによせる彼女たちの心づかいは，見ていてもほほえましいほどである。

ソビエトでは，普通男は60才，女は55才で恩給生活に入る。このときから毎月，最終給与額の二分の一が恩給として支給されるのだが，特殊な重労働に従っている人や，僻地で働いている人たちは，さらに低い年齢で恩給がもらえるようになるし（シベリアを指している）どんな職業についても本人の希望があれば，規定の年齢を越えても職場にとどまることも出来る。だから，頭脳労働者の場合，恩給年限がすぎても，そのまま働いている人が多いという。そのかわり，恩給年齢に達するまでに，男は30年間，女は25年間，社会的労働にたずさわる義務があり，労働条件が足りないと，それに比例して恩給の額が減るのである。各人はその能力に応じて，各人へはその労働に応じて，が，社会主義の原則であるからである。

ソビエトでは，学問や芸術，スポーツなどで，功績のあった人にしばしば「功労」の称号を贈られるが，恩給にもやはり，「功労」のつくものもある。功労年金だと，収入の如何にかにかかわらず全部受けることが出来，あらゆる交通機関が無料利用，サナトリューム無料療養クーポン券の交

付，年一回無料で国内旅行，などの特典がある。

あの，日本人で「ソビエト国籍第一号」岡田嘉子が近くこの特典にあづかることになっている。岡田嘉子といえば，昭和初期のトップスター，恋人の杉本良吉氏と「カラフト」に逃避行し，スパイと間違えられて二人は別々にされ，杉本氏は一年後病死し，岡田さんは異郷に転変，望郷の思いに骨までしゃぶられながら，さまよい歩く。終戦直後，ソ連の辺境のバザールで自作の風景画を売っている彼女をある日本人がみている。そういえば，岡田さんは，女子美術学校の出身である。その後モスクワに表われ，滝口氏と知りあい，異国の空に，まして50を越した婦人の身で，ソ連の芸大を卒業し，今でもモスクワ放送局の日本向けアナウンサーになっている。

日本を脱出して35年，でも彼女の日本語は実に正確，美しい。彼女の手紙の一節に，「お心のこもった親切なお手紙ありがとうございました，いつまでもお忘れなく覚えていてくださいますことを，心からうれしく感謝いたしています，私の亡父の生れは熊本で，現在残っているかどうかは存じませんがなつかしい土地であります，どうぞくれぐれもご自愛くださいまして，お元気でご幸福にお暮し下さいませ，モスクワ放送の時間表と波長を同封いたします。なお毎月最後の火曜日の「ソビエト文化」が私の受持ちとなっています」との事。

55才まで25年間の労働を義務づけられているソビエトの女性たちは，いまでも職業を持っことが生活の原則になっている。私に自分の奥さんを紹介してくれた男の友人たちは，妻の名前を告げたあと，きまって，彼女の仕事の種類なり，勤め先の名なりをつけ加えるのだった。

産前産後の休暇がたっぷりあって，託児所や幼稚園の施設がととのっているソビエトでも職業と家事労働を両立させるのは，女にとって，なかなかの負担にちがいない（前記にも書いたが重ねて）

税関設立95週年記念日を前に，敦賀税関支所は（S46.11.27）敦賀停泊中のソ連船カンスク号（4,531トン）のパシン・ビクトル船長等，乗組員5人を招いて，座談会を開いた。日ソ親善を図るこの座談会には，日本からは大岡敦賀税関支所長ら5人が出席，両国の気候，風土の違い，敦賀の印象などと共に，子供の保育問題について，両国のミニ国旗を中心に，なごやかなふん囲気で話し合った。

「子供の保育に対する質問について」パシン船長は，ソ連では，乳幼児を預かる施設が完備しており，子供は集団生活の中で成長との事。

そのせいか，ほとんどの家庭で，こどもは一人か二人，多くて三人が限度です。それでもう，ソビエト女性にとっては，家庭だけが自分の場であるという生活は，思ってもみられないことであろう。日本では，家を建てるため，こどもの教育のため，不時の病気のため老後のため，貨幣価値の変動を気づかいながら，貯金しつづけねばならないが，その住居，教育，医療，老後の生活すべて国が保証してくれる社会のしあわせを，特に私にはうらやましい，病気になれば金の心配もせずに入院して治療がうけられるのだし，どうにもならないほど，体が老いれば，養老院で暮すことも可能なのである。こんな好条件が「シベリア」の地に「かたく」しばっておくのかもしれない。

（著者　一般教養　昭和47年2月26日受理）